

せいけん
詩集

第八十三篇

作：近藤せいけん

「寒い朝」

おおやま みの 思索の小路を
大山の見える 思索の小路を
けさ ある 行きかう人も
今朝も歩く 行きかう人も
ジャンパー 手袋 マフラーをし
しろ いき はきながら
白い息をはきながら
あしはや とお
足早に通り返る
みず た 霜柱が立ち
水なしの田んぼに 霜柱が立ち
あさひ あ 霜柱が立ち
朝陽を浴びて 白い蒸気をあげている
あお そら たか くも
青い空 高い雲
さむ あせ
寒い朝
はる おおやま ふゆげしき
遙か 大山は冬景色

いちだん みず
すずめの一団が 水なしの田んぼに
ま お いそが さか
舞い降り 忙しくエサ探し
じょうくう
その上空を ハトの群が飛び交う
なにげ
いつもの 何気ない ありふれた
にちじょう ふゆげしき
日常の風景
しず
ただ ただ 静けさだけが
しはい
支配する 真冬の世界
さむ あせ
寒い朝
はる おおやま ふゆげしき
遙か 大山は冬景色

